

新しい感じ取り方

境川中学校 一年四組 内木智美

一つのものを見るとときに、自分ではAと感じ取っていたものが、人からはBともいえると指摘されると、なるほど、そうかと教えられたことが一度はあるだろう。

左の絵を見てみよう。この絵を見ると、馬に乗って、小川の川岸を進んでいく男たちがいるのが分かるだろう。しかし、男たちの反対側の岸にある岩の部分を見てみると、あちらこちらにオオカミが目キラせて、岩にひそんで男たちを見ている絵が浮かんでくるのである。男たちを中心に見ているときは、オオカミがいなくなり、オオカミを見ると一瞬のうちに男たちは目立たなくなってしまう。



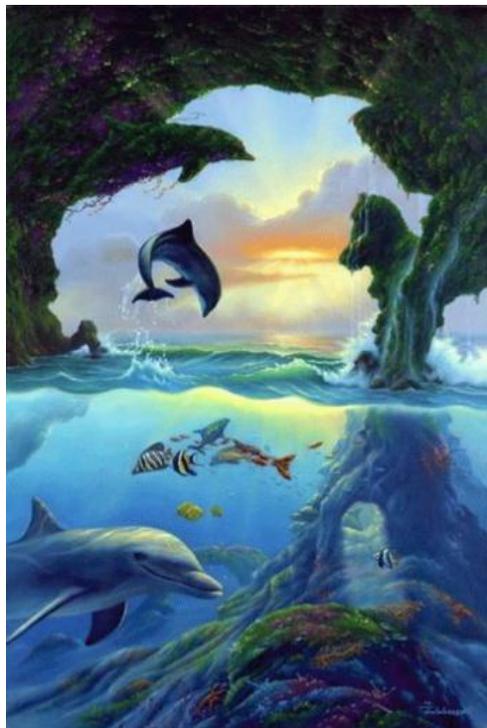
このようなことは、日常生活でもよく経験する。今、山の隣に美しい夕日が見えるとしよう。目は、その夕日に引きつけられる。そうなると山は、単なる背景になってしまふ。カメラでいえば、あつという間にピントが夕日に合わせられてしまふのである。

見るといふ働きには、驚かされることがある。一瞬のうちに、中心に見るものを決めたり、それを変えたりすることができるのである。

次の絵ではどうだろうか。一見すると、ただの森と、森の下にある海の中にすぎない。しかし、この絵には、あちらこちらにイルカが隠れている。水面で飛び跳ねたイルカがいるのが見える。その左上の森の枝にイルカが隠れている。その右上の空間にも、イルカが隠れているのである。そして、水中にも目をやると、悠々と泳ぐイルカの姿が見えるだろう。そのすぐ上には、魚の群れがイルカを象っている。その右に、木の根の穴の奥に小さいイルカがひそんでいて、その手前のコケが集まっている部分もイルカの形になっている。この絵には、全部で七頭ものイルカが隠れているのである。

このような森と海中の絵と感じていたものをイルカが隠れている絵と見るには、とりあえず、今見えている森と海中の絵を、意識して捨て去らなければならぬ。

わたしたちは、ひと目見たときの印象にしぼられ、一面のみをとらえて、その物のすべてを知ったように思いがちである。一つの図でも、物や風景でも、見方によって見え



る物が違う。少しでもいいので、そのものをじっくりと眺めてみたらどうだろうか。中心に見る物を変えたり、その見て感じ取ったことを意識して捨て去るなどをすれば、そのものの新しい面が気づき、新しい発見の驚きや喜びを改めて実感することができるだろう。